

# 経済地理メモ—社会主義国編①— ラオス

## 資料情報係

国名 ラオス人民民主共和国 (Lao People's Democratic Republic\*)

面積 236,800km<sup>2</sup>

人口 3,810,000人 (1982:推定)

首都 ビエンチアン (Vientiane\*)

## 国土

ラオスはインドシナ半島の中心部にあって 東はベトナム 南はカンボジア 西はタイ 西北はビルマ 北は中国と接し 海岸線をもっていない。国土の大部分が山脈と高原で 平野といえる地形は少なく 南部のラオス低地もベトナムとの国境の山脈から西へ緩く傾斜した台地である。そのため 歴史的にも地理的にも北方の諸民族が南下する通路とはなり難く 他民族との交流は東と南 とくにベトナム・カンボジア・タイを経て行なわれてきた。1年は雨季と乾季に分れ 雨季は5—10月 乾季は11—4月 年雨量は平地で1,500—1,700mm 山地で3,000mm 前後 1月の平均気温は北部で15°C 南部で23°C 7月は全国的に28—30°Cである。

## 住民

人口密度はおおよそ16人/km<sup>2</sup>で 隣接5か国のいずれよりも小さく その半分以下である。この国を構成する民族はおおよそ70を数え 低地ラオ(ラオルム) 高地ラオ(ラオテン) 最高地ラオ(ラオスン)に3大別され 狭義のラオ族は低地ラオに属し 全人口の半分以上を占めている。少数民族のなかで比較的人口が多いのは 最高地ラオのメオ族 高地ラオのヤオ族とカー族などである。かつて華僑が4万人ほど住んでいたが 1972—1974年の解放戦争の進行のなかで多くが出国し また新政府の華僑入国制限政策によって激減した。それとは逆に ベトナム諸民族の移住者が増加し 1984年初頭には25万人をこえたものと思われる。1963—1971年の統計によると 自然人口増加率(出生率-死亡率)はおおよそ2.4%である。

## 経済の特徴

ラオスは多機構経済を備えた後進農業国で 国民総生産の約3/4は農産と林産で占められ 天然資源の調査は進行中であるが その開発は全体としてはまだ日が浅く

近代工業の建設は緒についたばかりである。南部のラオス低地を含めて鉄道と海港が存在せず トラック道路の総延長はわずかに9,000km 前後 (26km/1,000km<sup>2</sup>) しかもその約70%が乾期でなくては使用できず 重要なメコン川の舟運も季節に左右されるため 国内の経済流通が非常に弱い。外国との経済的な結びつきも全体としては限られたものであるが 1977年の経済相互援助会議(CЭB, コメコン)第31回総会にオブザーバーとして参加して以来 同会議加盟国との経済・技術交流などが拡大され ベトナム独自の経済・技術援助と相まって社会主義諸国との結びつきは 経済分野を含む多面的な深まりをみせている。

## 鉱工業

ラオスに小規模ながら工業が興り始めたのは1950年代末のことで それは農産物の加工と発電であった。それまでにラオスに存在していた鉱工業といえば それはフランスが経営するいくつかの錫鉱山だけであった。それが現在では まだまだ遅れているとはいえ 第1図に示すような発展をみせている。とくに鉱業部門でいうと ラオスの最重要鉱産物は錫である。対フランス独立戦争の開始(1946年8月)以前には年平均錫精鉱生産量は1,200tを上まわっていたし 1940年にはその間のピーク1,893tの実績をあげていた。それが独立戦争中には大きく減産し 1954年の独立後 1967年に1,230tまで生産を回復し 1972年になってやっと1940年の生産レベルに到達した。1966—1978年の含金属量に換算した錫精鉱生産量の推移は第1表の通りである。なおチェコスロバキアの専門家によると ラオスの錫精鉱生産量は含金属量に換算して3,000tまで拡大可能とのことである。現在の主な錫鉱山としてはPhon Tiou 鉱山(タケク北北西:第1図参照)とNong Sung 鉱山(ビエンチアン西北西)があり 前者がラオス全体の錫精鉱既生産量のおおよそ70%を出している。

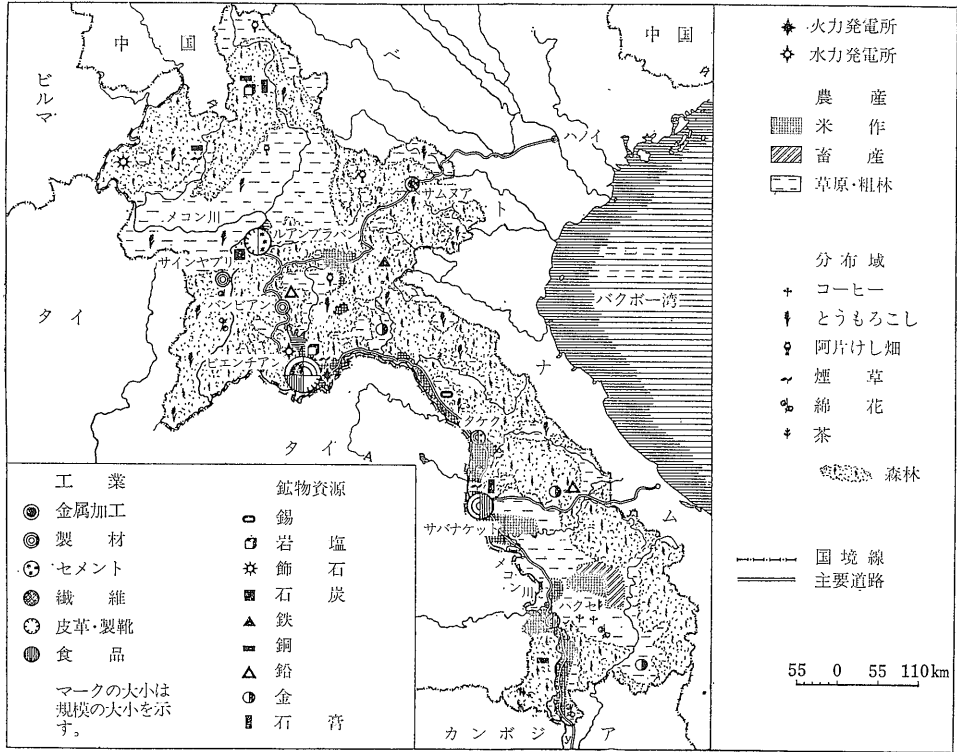
錫鉱床のほかに注目されている鉱物資源としては パクセ南方50km 付近のCham Passac 堆積性銅鉛床群(Cu品位1.00-6.23%) ムオンサイ北西—北北西20km 付近のMuong-Hai 銅鉛脈群などの銅鉛 バンビエン北方とヒエンコウアン付近の鉛・亜鉛鉱床群の銀に富んだ鉛—亜鉛鉱(方鉛鉱中のAg含有量1,225g/t) ムオンムオ

\* ラオ語での表現は不詳。

第1表 含金属量換算錫精鉱生産量の推移

暦年	1966	1967	1968	1969	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978
含Sn(t)	345	515	489	522	575	672	787	746	612	518	576	約600	約600

(B. A. Тюрин (1980) : “Найка”)



第1図 ラオス経済地理要図

イ付近 パクベン付近 パクター付近の各金鉱床(主として砂金鉱床)の金 ヒエンコウアン付近の厚さ20—30mもの堆積一被変成鉄鉱床の磁鉄鉱・赤鉄鉱資源(鉱量およそ1億t Fe65.66% SiO<sub>2</sub> 11% P 0.005% S 0.365% Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> 0.04%) Nam Sang 炭田とNam Thon 炭田の瀝青炭(2,310—4,740cal と 4,000—6,300cal)とLuan Prabang 炭田の無煙炭 サバナケット州の Dong Heh と Keng Kok の石膏鉱床(鉱量合せて25億t) ビエンチアン近郊のカリ塩層(厚さ平均38m 平均K<sub>2</sub>O28.24—31.24%) ルアンプラバン フォンサリ ビエンチアン タケット近郊の岩塩層があり 石灰石とドロマイトも豊富である。稼動中の油田も天然ガス田もまだないが ビエンチアン凹地の Nam Nham 川流域やバンビエン付近 サバナケット近郊ですでに噴油を得たとのことである。なお上記の諸鉱物資源のうち 開発されているのは錫鉱と瀝青炭および石灰石 石膏ぐらいのものである。

外国貿易

1977年の経済相互援助会議へのオブザーバー加盟直前からラオスの外国貿易構造は変化して社会主義諸国のウ  
1984年10月号

エイトが急増し 1970—1974年の5年間の輸出入総額に比べ 1976—1977年の2年間の当該総額が倍増した原因は上記ウエイトの急増にある。ただし 中国との関係の急冷は中国との貿易高の激減を招いたと思われるがその内容は不明である。ラオスの主な輸出品は 錫精鉱 材木 コーヒー・茶であり 小豆蔻 皮革 安息香 ゴム 漆も加わる。一方 主な輸入品は米 繊維・織維製品 石油製品 車輛である。

我が国との関係

ラオスは1955年12月に国連に加盟した。我が国との間で大使が交換されている。1973年のパトトラオ(ラオス愛国戦線)の指導による全国統一と社会主義国の誕生以前では ラオスの主要貿易相手国(米・仏・タイ・マレーシアなど5か国)の中に日本が入っていたが 1983年の実績でみると 我が国のラオスとの貿易は往復合計1,274万ドル(日本からの輸出895万ドル 日本への輸入379万ドル)でそれぞれ我が国の対世界貿易額の0.005% 0.007% 0.003%にすぎない。(文責:岸本文男)